北村秀行の“チャーマス・ブレイン”
“Char Mas.Brain”

連載 第136回

アイゴの仲間

ここ数年、関東周辺で数が増えているアイゴ。死滅回遊する魚だったが、温暖化の影響なのか越冬して繁殖している。今回は、そんなアイゴについて解説してもらおう！

解説●**北村秀行**

アイゴ

学名：*Siganus fuscescens*
英名：Mottled spinefoot
分布：青森県以南、琉球列島、台湾、フィリピン、西オーストラリアの岩礁域や藻場周辺の水深50m以浅に生息

三浦半島でアイゴが増加！ 海藻、海草が減少!!

オフショアの釣りばかりしているとショアの釣りがおろそかになり、海辺の環境の変化に鈍くなるようだ。

三浦半島の先端、城ケ島では2011年頃からアイゴが多く目立つようになった。捕食の食害で海藻、海草が減少し、磯焼け、浜焼けが報告された。

関東の海には少なかったアイゴが海洋温暖化で越冬し、初夏の6月に産卵しているようだ。夏に堤防の際では、孵化して成長したアイゴの若魚がたくさんいる。若魚が海藻、海草を捕食するので、海藻を食べるサザエ、アワビ、ウニが減少している報告もある。

海には海藻と海草がある。海藻は胞子によって繁殖する。岩礁帯に付着し、根、茎、葉が分かれていないコンブ、ワカメ、ノリなどがそうだ。

海草は種子植物の多年草。花を咲かせ種を作り、種や根茎により増える。アマモ、スガモなどが代表的。潮流や干満流の緩やかな内湾の砂泥地に繁殖する。

アイゴは海藻も海草も食べる。また小動物も食べる。

磯釣りで釣れたアイゴに刺されてしまった！

アイゴは暖海系の魚で、関東では、秋の終わりから初冬にかけて大型が黒潮流域に出現する。各鰭の棘に毒腺がある魚だ。

17.5度以下の潮温になると活動が鈍くなり、15度以下になると低温麻痺して死ぬ。近年、最低潮温期の4月頃の潮温が高く、冬眠をして越冬するとの報告がある。

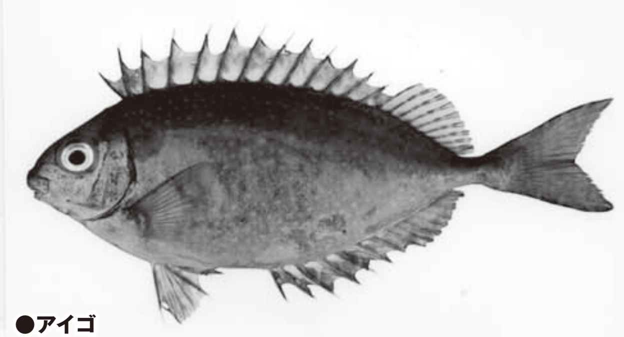
関西、九州では「バリ」と呼ばれる。専門の釣りもあるが、最近はグレ釣りでまじる感じで釣れる。まきエサは、米ぬかと押し麦をまぜたもの。付けエサは酒粕をBB弾程度の大きさに丸めて針先に刺す。関東ではあまり馴染みがない釣りだ。

まだ下田・須崎に御用邸がない頃、磯からのノリクシロの釣り（伊豆はハバノリで釣る。クシロはメジナの地方名）でアイゴが掛かった。抜き上げる時に魚が外れ、磯の上に落ち、ワンバウンドしてズボンの上から脹脛に当たった。チクっと感じ、それからが大変であった。

ジク、ジクと痛み、徐々に腫上がった。次第に痛みが強くなり、我慢できない痛みになった。口で「ウー」と言って我慢していたが、釣友が見かねて下田の病院に連れて行ってくれた。しかし、あいにくの日曜日で、大病院は休み。郵便局近くの小さい個人病院で治療してもらった。

刺された魚は「漁師泣かせ」の渾名があり、「漁師も泣くぐらい痛がる」と医師が言った。「よく我慢できたな！」と褒められたような言葉をくれた。刺されたのは朝の7時頃で3時間ちかく痛みを我慢したのだった。

今までに刺された毒魚のなかで一番痛かった。しかし、ハオコゼ、カサゴ、イズカサゴ、オニカサゴ等に刺されているうちに抗体ができて慣れたのか、最近は痛みを感じるのが薄くなったようだ。



●アイゴ
海洋環境により体色変異がある。小白点が少なく目立たないタイプ

アイゴの毒はタンパク質毒

虫や魚の毒棘で刺される毒はタンパク質毒。40～60度の熱で急速に分解するので、風呂や温泉に入ると症状は緩和する。棘には魚が死んでも毒があり、刺さると毒が入るので要注意だ。釣れた時や料理する時は棘をハサミで切り取るといい。

アイゴ科の魚の体形は側扁する。腹鰭の前部と後部に棘があり、その間に3軟条があり、1棘3軟条1棘と表記する。日本に生息するアイゴ属12種は、腹鰭が1棘3軟条1棘、背鰭は13棘10軟条、臀鰭は7棘9軟条と同じだ。胸鰭軟条数に違いがあり、全ての棘に毒がある。

また、全ての種がインド太平洋の熱帯・温帯海域に分布し、紅海に生息する種にはスエズ運河から地中海へ進出した種もいる。大西洋には生息しない。

スズキ目ニザダイ亜目アイゴ科（*Siganidae*）は全1属。アイゴ属（*Siganus*）全28種中、日本に生息は12種。

温暖化によって死滅回遊せず越冬するようになったアイゴ

◆アイゴ（藍子）

学名：*Siganus fuscescens*
英名：Mottled spinefoot

アイゴの仲間は熱帯域に生息する種が多くいるが、本種は温帯海域に出現する。青森県以南、琉球列島、台湾、フィリピン、西オーストラリアの岩礁域や藻場周辺の水深50m以浅に生息し、琉球列島、南西諸島等の亜熱帯、熱帯海域では河川の汽水域にも進出する。

海洋温暖化により、三浦半島先端、城ケ島、三崎周辺では2012年に越冬や産卵が確認されている。幼魚は流れ藻に付き、藻を捕食しながら、黒潮の北上とともに迷走回遊する。潮流任せの回遊をして低潮温になると死滅する死滅回遊、無益回遊と呼ばれる回遊をすることも多い。

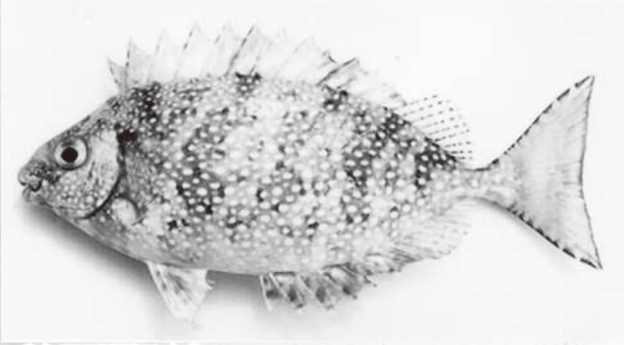
体色は緑褐色の地に褐色の横縞が数本あり、全身に白っぽい斑点がある。この斑点は環境や刺激によって素早く変化する。

胸鰭軟条は16～17軟条。口は小さいが唇は厚く、皮膚は厚く丈夫。産卵期は南で早く4月から始まり、三浦半島、佐島周辺では6月の終わりに産卵が確認され、8月頃に終わる。

沈性の粘着卵を産み、9～10月には3.5～4.3cmの稚魚が観察される。1歳で23cm前後、2歳で33cm前後、3歳で38cm前後、4歳で40cm前後に成長し、成長は止まる。最大40cm。

1990年以前は沖縄諸島周辺に生息する、体側に小さい白色斑模様が点在するアイゴをシモフリアイゴと呼び、学名は*S. canaliculatus*で別種扱いされていたが。遺伝子の解析で*S. fuscescens*の色彩変異で、シノニム（同種異名）とされたが、この個体はシモフリアイゴ型アイゴと呼ばれている。

釣りの対象魚であるが、関東ではあまり馴染みがなく釣れても喜ばれない。成魚の身肉は干物、塩焼き、煮付けなどで美味だが、内臓や皮に独特の匂いがある。焼酎を飲むエリアでは内臓を「ぜんまい」と呼び、珍重されている。



●シモフリ型アイゴ
DNA鑑定される以前は、アイゴとは別種とされた。小白点が目立つタイプ

●Profile
北村秀行 きたむらひでゆき
1946年9月8日生まれ。
“チャーマス”の愛称で親しまれ、この人なくして今の日本のソルトウォータールアーフィッシングの発展はないと言っても過言ではない。魚やタックル、そして自然など、釣りに関係するありとあらゆる物事に対する豊富な知識から導き出される卓越したフィッシング理論には定評がある。クラブビッグワンズ代表。tailwalk スーパーバイザー

062_063.indd 62-63 16/01/08 10:10